様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３８０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０６５３

研究課題名（和文）未就園児の早期療育に向けた保護者の合意を導き出す実践プロセスと支援技術の明確化

研究課題名（英文）Clarification of the practice process and support skills to elicit parental agreement for early supprt of of Children with Developmental Disabilities.

研究代表者
江口　晶子（Eguchi, Akiko）

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：００３３９０６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1歳6か月児健診後の継続支援が困難な発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対する保健師による支援技術の明確化を目的とした。全国1,535市町の保健師を対象にデルファイ法による3回の質問紙調査を行い、熟練保健師への面接調査を基に作成した「保護者支援技術」（4領域45項目）の実践における妥当性を検討した。5段階リッカートスケールの「大いに妥当」「妥当」を同意とみなし同意率は80%に設定した。第1回436名、第2回119名、第3回116名から有効回答を得た。結果の分析、修正、フィードバックを繰り返し、3回目で全項目が同意基準に達したため、本支援技術に対する保健師の合意を得たと判断した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
発達障害の早期支援における保健師活動実践の課題である1歳6か月児健診後の継続支援が困難な状況に焦点化し、保健師による保護者への支援技術を、実践者である保健師の合意に基づき明らかにすることは、保健師による実践知の共有につながり、発達障害の特性を有する子どもとその保護者への早期支援の質や専門性を高めることに資する。子どもの有する発達特性に起因する何らかの発達支援ニーズ，育児支援ニーズをもつ親子を、適時適切な早期支援に結びつけることは、子どもの発達を促し，二次的な問題の予防につながるとともに、保護者の育児不安や育児負担の軽減，肯定的な育児態度の形成につながり、ひいては児童虐待の予防にも寄与する。

研究成果の概要（英文）：This study was aimed at clarifying the skills used by municipal public health nurses to support parents of children with developmental disabilities in cases where continued support was difficult to provide after the 18-month checkup. A questionnaire survey targeting 1535 public health nurses nationwide was conducted three times using the Delphi method. On the basis of results from prior research, public health nurses were asked to assess the appropriateness of “parent support skills” (four categories, 45 items) in practice using a 5-point Likert scale. “Largely appropriate” and “appropriate” were considered to represent agreement, and the agreement rate was established as 80%. There were 436 valid responses from the first survey, 119 from the second, and 116 from the third. On the basis of the participants’ agreement ratings, this study clarified “parent support skills” comprising four major categories and a total of 45 items.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：保健師　発達障害　保護者支援　支援技術　1歳6か月児健康診査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

発達障害の早期発見・早期支援は、児の発達を促し、社会適応の幅を広げ二次障害の発生を防ぐとともに、虐待予防の観点からも注目されており、１歳半健診は、その端緒として大きな役割をもつ。近年、各自治体では、健診の実施方法や内容の改善・充実に取り組んでおり、健診における発達障害の早期発見の精度は向上している。しかし、発達障害は、定型発達との境界が不明確である他、行動特性が発達過程において徐々に明らかになってくる。そのため、家庭での個別の関わりが中心になる保護者は、児のもつ特性に気づきにくく、特に未就園児ではこの傾向が顕著である。さらに、保護者自身に発達障害の特性が認められることもある。したがって、保健師が支援の必要性を認めても、保護者が児の特性や支援の必要性を理解し行動化するのは容易ではなく、場合によっては、拒否的な態度をとることもある。実際、保護者との信頼関係の構築や、保護者の理解を得て支援につなげることの難しさが報告されている。

１歳半健診での児のもつ発達障害の特性に対する保健師の気づきを、その後の適切な支援へとタイムリーにつなげることの発達支援上の意義は大きいが、援助要請の乏しい保護者から児の発達支援に対する理解と関与を引き出すためには、保護者自身を如何に理解し支援するかという保健師としてより高度な支援技術を必要とする。これまで、保護者との間で継続的・安定的な関わりをもつことが困難な状況に焦点をあてた支援技術の分析が十分行われているとは言い難く、１歳半健診を起点に位置づけた検討もされていなかった。

そこで本研究では、発達障害児とその家族への支援経験が豊富な熟練保健師が実践で用いている技術に着目し、彼らが１歳半健診後の継続支援の導入が困難な未就園児に向けた保護者支援において「何に着目し、その意味をどのように解釈・判断し、どのような関わりをしているのか」、つまりその視点・判断・行為の明確化に取り組むことで、発達障害の特性をもつ未就園児の早期療育に向けて保護者の合意を導き出すための実践プロセスと支援技術について、専門性を解明し、実践において適用可能な形で示す必要があると考えた。

２．研究の目的

１歳半健診後の継続支援が困難な状況に焦点をあてて、発達障害の特性をもつ未就園児の早期療育に向けて保護者の同意を導き出す保健師の実践プロセスと支援技術を明確化することを目的とした。

３．研究の方法

研究デザインは、デルファイ法による量的記述的研究である。

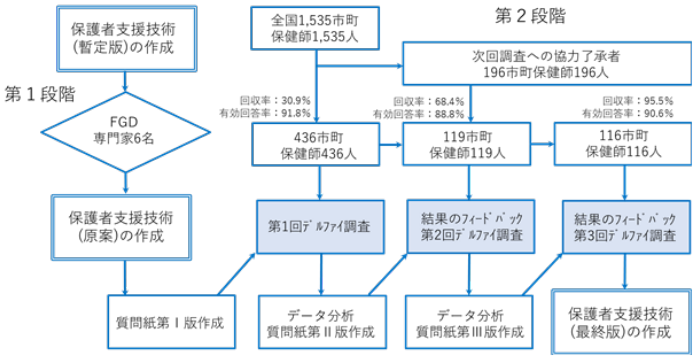

図１　研究プロセス

1)　第１段階　保護者支援技術（原案）の作成

研究者らの先行研究の成果に基づき作成した「保護者支援技術（暫定版）」について、行政保健師経験を有し公衆衛生看護学を専門とする大学教員６名（以下，専門家）によるフォーカス・グループ･ディスカッションを行い、検討、修正を行った。保健師が各支援技術を用いる目的である「A：保護者との間に生じているニーズの認識のずれを読み解く（11 項目）」、「B：子どもと保護者の変化を小出しに引き出す（10 項目）」、「C：それまでの関わりの方向性や内容の転換を図り，次の段階の支援に進める（10 項目）」、「D：親子にとって安心できる支え手になる（14 項目）」の 4 領域で構成される計 45 項目の技術項目と、その内容説明からなる「保護者支援技術（原案）」を作成した。

2)　第２段階　デルファイ調査

全国 1,535 市町の母子保健部門の管理者に、本調査の対象者の選定基準に該当する保健師１名の選出を依頼し、研究参加への同意が得られた者、第１回：475／1535 人（回収率 30.9%）、第

2 回：134／196 人（68.4%）、第 3 回：128／134 人（95.5%）を対象に、計 3 回の質問紙調査を実施した。「保護者支援技術」の実践における妥当性について 5 段階のリッカートスケールで回答を求め、各選択肢の回答人数と割合を算出した．同意基準は,「大いに妥当」と「妥当」を同意とみなし、同意率は 80%に設定した。集計結果および記述された意見に基づき、専門家による検討の上、項目の追加・削除、文言の修正を図った。

４．研究成果

以下、デルファイ調査の結果を示す。なお、以下、文中の表記は、領域を【 】、技術項目を≪≫、技術内容を＜＞とした。

1)　回収数および有効回答数

全 3 回の調査の回収数及び回収率は、第 1 回 475 人（30.9%）、第 2 回 134 人（68.4%）、第 3 回 128 人（95.5%）であった。このうち、行政保健師の職務経験が 5 年以上を有効回答とした。有効回答数および有効回答率は、第 1 回 436 人（91.8%）、第 2 回 119 人（88.8%）、第 3 回 116 人（90.6%）であった。

2)　参加者の基本属性および職務経験

全 3 回の参加者の基本属性および職務経験は、ほぼ同様の傾向にあった。第 1 回調査参加者の所属自治体は、「町」が 37.2 %で最も多く、次いで「市（人口 5 万以上～10 万未満)」(20.0%)、「市（人口 5 万未満)」(18.8%)、「市（人口 10 万以上)」(15.1%）の順となっており、「中核市（特例市を含む)」は 6.4%、「政令指定都市」は 1.1%であった。年齢は「40 代」(47.9%）が最も多く約半数を占め、「30 代」34.2%、「50 代」は 13.5%であり、「20 代」(3.9%)、「60 代」(0.5%)は少なかった。性別は、「女性」が 98.6%を占めていた。行政保健師の経験年数は、平均 16.7±7.6 年（範囲 5-40 年）であり、このうち、母子保健業務の経験年数は、平均 10.5±6.8 年（範囲 1-36 年）であった。

3)　各回の同意率およびコメント件数の推移

第 1 回調査から第 3 回調査までの各技術項目の同意率の推移を表 1 に示した。

第 1 回および第 2 回調査における各領域のコメント件数を表 2 に示した。

表 2　第 1 回および第 2 回調査における領域別コメント件数

	領域A	領域B	領域C	領域D	計
第1回	39件	112件	97件	131件	379件
第2回	13件	15件	33件	13件	74件

(1) 第 1 回調査（質問紙第Ⅰ版）

第 1 回調査の結果、技術項目および技術内容の実践における妥当性について「5：大いに妥当である」と「4：妥当である」が回答全体の 80%以上を占めた技術項目、すなわち同意率 80%以上の技術項目は、全 45 項目中 42 項目であり、そのうち 33 項目は同意率 90%以上であった。一方、同意率 80%以上 90%未満の技術項目は 9 項目（領域 B：2 項目、領域 C：3 項目、領域 D：4 項目）であり、中でも B-3≪親が、子どもの特性を客観的に見ることができる場や機会をつくる(81.7%)≫、D-14≪親との間で何を話してもよい時間をつくり、親の心の内にある思いを引き出す(80.0%)≫の同意率が低い傾向にあった。同意率 80%未満の技術項目は 3 項目あり、このうち 70%以上 80%未満は、D-3≪保育園等の関係者がもつ親子との信頼関係の力を借り、保健師に対する親の認識を高める（78.6%）≫と D-6≪親の様子から逡巡する気持ちを察して、深入りを避ける（75.0%）≫の 2 項目、70%未満は C-10≪同じ立場の親子とつなぎ、支援利用を躊躇する親の意思決定を促す（65.5%）≫の 1 項目のみであった。

各技術項目および技術内容に対し、計 379 件のコメントを得た。各領域のコメント件数では、領域 D：131 件、領域 B：112 件、領域 C：97 件、A：39 件の順に多かった。コメントの記述がなかった技術項目は、D-12≪親のがんばりや強みを具体的に捉え、言葉にして返す（97.9%）≫の 1 項目のみであった。

肯定的な記述のみだった D-1≪他機関・他職種との相互理解や信頼形成により、支援者同士が補い合い親子の信頼を得る（98.4%）≫および、コメントの記述のなかった D-12 の 2 項目を除く 43 項目について、コメントを基に内容や表現の修正を行い、質問紙第Ⅱ版を作成した。なお、同意率 80%未満を下回った 3 項目については、第 2 回調査の結果で再検討することとし、削除は行わなかった。

(2) 第 2 回調査（質問紙第Ⅱ版）

第2回調査の結果、全45項目中44項目で同意率80%を上回り、同意率90%未満の技術項目は1項目（B-3：81.7%→87.4%）のみであった．第1回調査で同意基準を下回った3項目（C-10、D-3、D-6）のうち、C-10≪具体的な情報や経験の得られる場につなぎ、支援利用をためらう親の意思決定を促す（65.5%→72.3%）≫の1項目のみが、2回目も同意率80%未満であった。

各技術項目へのコメントは、計74件へと減少した。領域別の内訳をみると、領域C：33件が最も多く、同意基準を下回ったC-10には14件のコメントがあった。一方、第1回においてコメント件数が最も多かった領域Dのコメントは、領域A：13件、領域B：15件に並ぶ13件へと減少していた。

各支援技術の検討基準すなわち、同意率90%未満、「大いに妥当である」の割合が50%未満の項目に加え、同意率もしくは「大いに妥当である」の割合が第1回より低下した計28項目について、コメントを基に検討を行なった。結果、計17項目（A-4、A-5、A-6、A-8、A-9、B-3、B-5、B-8、B-10、C-2、C-3、C-4、C-6、C-7、C-8、C-9、D-5）について文言の一部を修正した。また、第1回より「大いに妥当である」の割合が低下した2項目（A-7：-4.4%、A-11：-7.0%）は、第Ⅰ版の文言に戻した．第1回調査に続き同意率80%を下回ったC-10は領域Cから削除した。一方、領域Bに≪定期的な見守りの中で、親の不安感や困難感の高まりを見逃さず関わる（B-11）≫を追加し、領域A（11項目）、領域B（11項目）、領域C（9項目）、領域D（14項目）の4領域45項目からなる質問紙第Ⅲ版を作成した。

(3) 第3回調査（質問紙第Ⅲ版）

第3回調査の結果、4領域45項目の全項目で同意基準である同意率80%を上回った。質問紙第Ⅲ版で追加したB-11の同意率は96.6%であった。同意率80%以上90%未満の技術項目は、第2回の1項目から4項目（領域B：1項目、領域C：2項目、領域D:1項目）に増加した。このうちB-3≪親が一歩引き子どもの様子を見る機会をつくり、発達や特性を一緒に確認する（81.7%→87.4%→87.1%）≫は全3回を通して90%を下回った。C-8≪親の身近な理解者である家族の協力を得るための手助けをする（84.8%→90.8%→85.3%）≫、D-11≪親子と会える機会を見つけ、関わりを重ねる中で信頼関係をつくる（83.0%→96.6%→87.9%）≫の同意率は、第2回で改善したが、第3回で再度低下した。C-9≪親の身近な理解者である家族の協力を得るための手助けをする（93.6→95.8→85.3%）≫は、全3回を通して第3回の同意率が最も低かった。

第3回調査では、最終的な同意率の確認を目的としたためコメント欄は設けなかった。第2回より同意率が5%以上低下した5項目（B-5：-6.1%、C-9：-10.5%、C-8：-5.4%、D-3：-5.3%、D-11：-8.7%)、「大いに妥当である」の割合が5%以上低下且つ同意率の低下もみられた4項目（B-3：-0.3%、C-3：-4.4%、D-12：-2.6）の計9項目のうち、質問紙第Ⅲ版の作成において修正を行っていた5項目（B-3、B-5、C-3、C-8、C-9）について、第Ⅱ版の文言に戻した上で「保護者支援技術（最終版)」とした。

4) 考察

全3回を通して、各技術項目の妥当性に不同意との回答は少数であったが、「どちらともいえない」の割合は1回目1-30%、2回目0-24%、3回目1-15%みられ、その理由として「保護者の受け止め方、社会性、理解力等によりケースバイケース、逆効果となる可能性もある」、「保護者の不安を高める、追い詰める危惧がある」といった意見があげられた。これは、本研究で焦点をあてている1歳半健診の頃が、子どもの発達特性に対する保護者の認識の差が大きく、気持ちの揺れも顕著な時期であることの反映であるといえた。同時に、保健師は、個々の親子の多様な状況に対する複合的な判断のもと、適切な手段を選択し組み合わせて支援していることを示していると考えた。そこで、専門家との検討では、技術を用いる状況により、各技術項目の適用の妥当性や優先性に差異の生じる可能性はあるが、各領域の示す目的に照らして、各項目が意図するところは保健師による保護者支援として適切か、意図の具現化に欠かせない重要な内容は含まれているか、また、各項目の意味するところを誤解なく理解できる表現となっているかに留意し、文言の追加・修正を行い、同意率を上げていった。同意基準に達しなかったため削除した1項目および、3回目の同意率が90%を下回った4項目への意見をみると、参加者の妥当性の判断には、実践での頻度や適用可能性の他、対人支援技術としての難易度も影響している可能性があった。計3回の調査に繰り返し回答してくれた参加者は本技術に経験と関心を持っている者であり、精度の向上に寄与したと考えた。

5) 結論

デルファイ調査の結果、発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対し、1歳半健診後の継続支援が困難な状況において市町村保健師が用いる支援技術として、領域A：11項目、領域B：11項目、領域C：9項目、領域D：14項目で構成される4領域45項目の保護者支援技術が、参加者の合意を得て明らかになった。

表１　第１回調査から第３回調査までの同意率の推移

(%)

領域(目的)	No	技術項目	第１回（N=436）※1			第２回（N=119）※2			第３回（N=116）※3		
			妥当	どちらとも言えない	妥当でない	妥当	どちらとも言えない	妥当でない	妥当	どちらとも言えない	妥当でない
保護者との間に生じているニーズのずれを読み解く	A-1	親子の様子に対する保健師の違和感に着目し，背後にある理由を推測する	95.6	4.1	0.2	98.3	0.8	0.8	96.6	2.6	0.9
	A-2	親子の様子に対する保健師の違和感について，多角的・客観的な情報を照合し，確認する	97.0	2.5	0.5	100.0	-	-	98.3	0.9	0.9
	A-3	子どもに対する親の関心の程度，観察力や理解力を見極める	97.5	2.5	-	99.2	0.8	-	97.4	2.6	-
	A-4	育児に対する親自身の考え方を把握する	95.9	3.9	0.2	93.3	6.7	-	100.0	-	--
	A-5	生活の中で，親が優先している事柄を把握する	90.6	9.4	-	95.8	3.4	0.8	97.4	2.6	-
	A-6	家族の関係性や認識の相違が，親の言動に影響している可能性を推測する	96.5	3.5	-	97.5	2.5	-	99.1	0.9	
	A-7	子どもの発達に，不適切な養育が影響している可能性はないか確認する	98.4	1.6	-	98.3	1.7	-	99.1	0.9	-
	A-8	普段の生活や育児の中での，子どもの特性の現れ方を推測する	98.4	1.6	-	98.3	1.7	-	99.1	0.9	-
	A-9	親自身がもつ対人関係の特徴や生活上の困難さを推測する	98.2	1.8	-	99.2	0.8	-	99.1	0.9	-
	A-10	親子の生活をイメージした共感的・具体的な問いかけにより，育児や生活の実情を引き出す	91.5	8.0	0.5	96.6	3.4	-	99.1	0.9	-
	A-11	親と一緒に見ている場面での子どもの様子をきっかけに，親の心配や困りごとを引き出す	97.9	1.8	0.2	99.2	0.8	-	98.3	1.7	-
子どもと保護者の変化を小出しに引き出す	B-1	今後の親の気づきや対応につながる子どもの特性を，親の状況を考慮しつつ，わかりやすく伝える	85.1	13.8	1.1	90.8	8.4	0.8	94.8	5.2	-
	B-2	経過観察の目途や観察の視点を，親の状況を考慮しつつ，わかりやすく伝えて共有する	92.4	7.3	0.2	97.5	2.5	-	98.3	1.7	-
	B-3	親が，子どもの特性を客観的に見るための機会をつくる	81.7	16.5	1.8	87.4	11.8	0.8	87.1	12.1	0.9
	B-4	親が子どもの気持ちに気づけるように，子どもの行動を発達の視点から意味づけ，親と共有する	93.1	6.0	0.9	96.6	3.4	-	98.3	1.7	-
	B-5	毎日の育児の中で，親が気持ちを楽にして子どもと向き合うことにつながる提案をする	92.7	6.4	0.9	97.5	2.5	-	91.4	7.8	0.9
	B-6	親のできていることを捉え，それに補足する形で子どもへの関わり方を提案する	98.6	1.4	-	100.0	-	-	98.3	1.7	-
	B-7	他職種による専門的助言を，親子の生活に結びつけ，かみ砕いて伝える	95.4	4.6	-	96.6	3.4	-	99.1	0.9	-
	B-8	親の受け止めや能力に応じて，親が自ら考え，決定できるような工夫や手助けをする	90.6	9.4	-	93.3	6.7	-	96.6	3.4	-
	B-9	子どもの小さな成長を捉えて，親に具体的に伝えることを繰り返す	97.2	2.8	-	100.0	-	-	99.1	0.9	-
	B-10	子どもの小さな変化を引き出す関わりを親と一緒にやってみて，特性に応じた関わりの意味を共有する	91.1	7.8	1.1	94.8	4.3	0.9	94.0	6.0	-
	B-11	定期的な見守りの中で，親の不安や困難感の高まりを見逃さず関わる							96.6	3.4	-

表１　第１回調査から第３回調査までの同意率の推移（続き）

(%)

領域(目的)	No	技術項目	第１回（N=436）※1			第２回（N=119）※2			第３回（N=116）※3		
			妥当	どちらとも言えない	妥当でない	妥当	どちらとも言えない	妥当でない	妥当	どちらとも言えない	妥当でない
それまでの関わりの方向性や内容の転換を図り次の段階の支援に進める	C-1	親が子どもの現状に向き合おうとする兆しを見逃さず，わが子の支援の必要性を意識化できるように促す	91.0	8.5	0.5	96.6	3.4	-	97.4	2.6	-
	C-2	親が自ら，支援の必要性を表出したタイミングを捉え，支援利用を具体的に進める	87.1	11.0	1.8	95.8	4.2	-	97.4	2.6	-
	C-3	就園（就学）の時期を見据えて，集団の持つ力を子どもの育ちに生かすための準備を促す	88.9	10.1	0.9	98.3	1.7	-	94.0	6.0	-
	C-4	そのときの親子の状況に合わせた最善策を見出し，柔軟に提供する	94.3	5.5	0.2	97.5	2.5	-	97.4	2.6	-
	C-5	支援サービスに対する親の抵抗感を軽減し，納得して利用するための工夫や配慮をする	94.0	5.3	0.7	97.5	1.7	0.8	96.6	3.4	-
	C-6	今の支援の意味を，少し先の見通しをもって親に伝える	96.1	3.9	-	95.0	5.0	-	98.3	1.7	-
	C-7	支援者による親子への適切な対応や配慮のための事前調整をする	93.8	5.7	0.5	95.0	5.0	-	96.5	3.5	-
	C-8	親子と支援者の間に生じている食い違いを確認し、必要に応じて調整をつける	84.8	14.3	0.9	90.8	9.2	-	85.3	14.7	-
	C-9	親の身近な理解者である家族の協力を得るための手助けをする	93.6	6.2	0.2	95.8	4.2	-	85.3	14.7	-
	C-10	具体的な情報や経験の得られる場につなぎ，支援利用をためらう親の意思決定を促す	65.5	30.3	4.1	72.3	24.4	3.4			
親子にとって安心できる支え手になる	D-1	他機関・他職種との相互理解や信頼形成により，支援者同士が補い合い親子の信頼を得る	98.4	1.6	-	100.0	-	-	98.3	1.7	-
	D-2	保育園等の関係者の協力を得て，間接的に親子の見守りを継続する	96.3	3.7	-	96.6	2.5	0.8	95.7	4.3	-
	D-3	保育園等の関係者がもつ親子との信頼関係の力を借り，親子との関係をつくる	78.6	19.5	1.8	95.8	4.2	-	90.5	8.6	0.9
	D-4	拒否や否定の背後にある，身構えるしかない親の不安な気持ちを汲む	96.8	3.0	0.2	95.8	4.2	-	95.7	4.3	-
	D-5	子どものよい変化を共有し，親の気持ちがほぐれたときをきっかけに関わる	89.4	9.2	1.4	95.0	4.2	0.8	96.6	3.4	-
	D-6	親の揺れ動く思いを察したときは，急がず，無理のない関わりを続ける	75.0	22.9	2.1	98.3	1.7	-	98.3	1.7	-
	D-7	親の思いや考えを，まずは一旦，そのまま受け止める	91.1	8.0	0.9	97.5	2.5	-	99.1	0.9	-
	D-8	保健師にできることや，いつでも相談して欲しいことを，あらかじめ親に伝えておく	91.7	8.0	0.2	98.3	1.7	-	99.1	0.9	-
	D-9	信頼関係の糸口として，まずは，親の関心や求めを尊重しつつ関わる	88.7	11.0	0.2	95.8	3.4	0.8	95.7	3.4	0.9
	D-10	親の困り感に役立つ生活上の工夫を提案し，継続した関わりにつなげる	97.9	2.1	-	98.3	1.7	-	96.6	3.4	-
	D-11	親子と会える機会を見つけ，関わりを重ねる中で，信頼関係をつくる	83.0	15.2	1.8	96.6	1.7	1.7	87.9	11.2	0.9
	D-12	親のがんばりや強みを具体的に捉え，言葉にして返す	97.9	1.8	0.2	100.0	-	-	97.4	2.6	-
	D-13	親自身の健康を気遣い，心配していることを伝える	97.0	2.5	0.5	100.0	-	-	98.3	1.7	-
	D-14	ゆっくりとした場や時間をつくることで，親の心の内にある思いを引き出し，分かち合う	80.0	17.7	2.3	96.6	3.4	-	97.4	2.6	-

※　　：同意率 90%未満
※1　A-1, A-3, A-2, B-1, B-8, C-9, C-8, C-7, C-4, C-1, C-2, C-6, C-10, D-11, D-3, D-4, D-9, D-2, D-14, D-12, D-13：n=435　A -6, A-4, C-3, C-5：n=434
※2　B-10：n=117　A-7：n=118
※3　C-7, C-4, C-6：n=115

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 江口晶子、荒木田美香子	４．巻 25(1)
２．論文標題 発達障害の特性をもつ子どもの親に対する熟練保健師による支援過程と支援技術ー1歳6か月児健診後の継続支援の導入が困難な状況に焦点をあててー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 家族看護学会誌	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 江口晶子、荒木田美香子、松坂由香里、渡部瑞穂、大塚敏子、三輪眞知子、岩清水伴美、岩本真弓
２．発表標題 市町村保健師による発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対する支援技術の明確化-1歳半健診後の継続支援が困難な状況に焦点をあてて-
３．学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 江口晶子
２．発表標題 発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対する保健師の支援技術-１歳６か月児健診後の継続的支援の導入が困難な状況に焦点をあてて-
３．学会等名 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三輪　眞知子 (Miwa Machiko) (10320996)	聖隷クリストファー大学・看護学部・特任教授 (34327)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	竹中　香名子 (Takenaka Kanako) (40733192)	愛知学院大学・心理学部・講師 (33902)	
研究分担者	岩清水　伴美 (Iwashimizu Tomomi) (60516748)	順天堂大学・保健看護学部・教授 (32620)	
研究分担者	長谷川　喜代美 (Hasegawa Kiyomi) (90313949)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	岩本　真弓 (Iwamoto Mayumi) (00733776)	岡山県立大学・保健福祉学部・助教 (25301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関